



Title	田中謙二・一海知義訳註『史記』朝日新聞社（朝日文庫，中国古典選）1978年
Author(s)	勝藤， 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 1, p. 375-380
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79471
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔書 評〕

田中謙二・一海知義訳註『史記』朝日新聞社
(朝日文庫, 中国古典選) 1978年

勝 藤 猛

Review:

Si-ma Qian's *Shi-ji*, or *Memories of History*, with translation and annotation
by Tanaka Kenji and Ikkai Tomoyoshi.

by Takeshi KATSUFUJI

ま え が き

これは書評というより、史記をできるだけ楽しく読む方法を考えようとするものである。史記は我が国で昔から絶えることなく愛読されてきた。例えば、枕草子、第211段に、書を挙げ、その中に、史記・五帝本紀がある。ただし後者は前者の冒頭の一部を成す。49段では、史記刺客伝から、予譲の言「士為知己者死、女為説己者容」を引く。しはおのれをしるもののためにしし、おんなはおのれをよろこぶもののためにかたちづくる(本シリーズ『史記』第2冊87頁)

与謝蕪村の句には、史記からの語を含むものが、いくつもある。刺客伝からは「易水にねぶか流るゝ寒かな」

また夏目漱石は、左伝・史記・国語・漢書を愛読した。

現在も、史記の原文や訳・註を書店や図書館で見つけるのは、容易である。廉頗・藺相如伝だけでも、「完璧」かんぺき「刎頸之交」ふんけいのまじわり「膠柱而鼓瑟」ことじにかわしてしつをこす、の3句が、諺として国語辞典に載っているし、「趙括の兵法」も知られている。

一般読者または学生は、まずは史記を楽しんで読むべきである。その目的にふさわしいものとして、数ある史記のなかでこれを選んだ。楽しむには負担を感じないことが必要で、5冊全部を読まなくてもよい。1冊だけなら、第2冊が面白い。この書評では、第2冊を主とし、とくに廉頗・藺相如、呂不韋、刺客(とくに荊軻)の列伝を取り上げる。項羽本紀はあまりにも有名なので、省略する。

1 語 法

漢文を楽しむには、或る程度の文法を知っていることが要求される。参考書として小川環樹・西田太一郎『漢文入門』岩波全書、1957年がよい（以下、入門と略す）

漢文を正しく理解するのに必要でありながら、案外おろそかにされているのは、助辞または助字である。「助辞とは、単独では実質的内容のある意味を表わさず、他の実辞や文に結びついて、その語や文の意味を充実させるもの」（入門12頁）である。助辞は必須の文字ではないが、あるのと、ないのとでは、ニュアンスが異なる。

専門家でない読者の心構えとして、伝統的な訓読の文法を知らなくてもよい。むしろ西洋語の文法概念を用いて漢文を分析してみるのがよからう。

「廉頗者、趙之良将也」「者」は「君者などは君というものを指示して、その本質を明らかにする場合の用法で、日本語の“君というのは”に当たる。訓読には“君トイウ者”あるいは“君ナル者”と読む」（入門29）

「也」は「説明・指定の助辞，“だ”“のだ”“なのじゃ”という語気を示す」（入門33）列伝はみな「……者——也」（……という人はね、——なのですよ）という文で始まっている。

「之」は「の」に当たる。「趙良将」とするより、わかりやすく、またリズムがよいからであろう。

次に廉頗・藺相如伝から、条件文を抜き出してみる。条件文は、条件節と帰結節から成る。その間に／を引く。下線 は条件節に、 は帰結節に、用いられる助辞を示す。助辞であるから、ないこともある。カッコ内は本書の頁数である。

欲予秦／秦城恐不可得、徒見欺。しんにあたえんとほっせば／しんのしろ、おそらくはうべからずして、いたずらにあざむかれんのみ（9）

欲勿予／即患秦兵之来。あたうるなからんとほっせば／すなわちしんのへいのきたらんことをうれう（続き、上と逆の仮定）

「欲」は意志または未来を意味するが、ここでは条件を示すと見てよからう。

取吾璧、不予我城／奈何。わがたまをとりて、われにまちをあたえずんば／いかんせん（12）

条件・帰結を示す助辞はないが、内容から、条件文のように訓読する。

今兩虎共闘／其勢不俱生。いまりょうこ、ともにたたかわば／そのいきおい、ともにはいきざらん（24）

入門17に、部分否定の例文として見える。「今」が仮定を示すことは、同63。なお61-66に、仮定文の詳しい説明がある。

今縦君家而不奉公／則法削。いまきみのいえをゆるして、こうにほうぜずんば／すなわちほうはけずられん（28）

法削／則国弱。国弱／則諸侯加兵。諸侯加兵／是無趙也。（続き）

「則」「是」によって帰結を示し、条件文を連続させている。

奉公如法／則上下平。こうにほうずること、ほうのごとくせば／すなわちしょうか、たいらかならん（続き、上と逆の仮定）

上下平／則国彊。国彊／則趙固。（続き、条件文の連続）

使趙不将〔趙〕括／即已。もししょうをして、かつをしょうたらしめずんば／すなわちやむ（35）
若必将之／破趙軍者必括也。もしかならずこれをしょうたらしめば／ちょうのぐんをやぶらしむるものは、かならずかつならん（続き、上と逆の仮定）

「訓読された漢文は、日本語としても一種の古典語であって、現代語でない」（入門6）その一例として、「居二年」おること、にねん（27）「おる」は現代語としては理解できない。「居は、特記すべき事件もなく日がたつこと」（165）この説明は初出の箇所でする方がよい。

「居頃之」おること、これをしばらくして（89, 111）は「しばらくすると」

この訓読語「しばらく」は時間を意味するが、「且」を「しばらく」と読むのは、どういうことか。呂不韋が邯鄲で子楚に「吾、能く子の門を大にせん」と言ったのに、子楚は答えて言う「且（しばらく）く自ら君の門を大にし、而して乃ち吾が門を大にせよ」（55）この「且」は『支那文を読む為の漢字典』に「希望する所は此に止まらざるも、暫らく然かなしおく意」というとおり、希望の程度を示す。ここでは、子楚としては、自分の繁栄を考えてくれるのは最も望ましいが、とりあえずは、呂不韋自身の家を大きくせよ、と思っているのである。

「且」の他の用法については、入門25-6参照。

2 用 語

一 死亡についての語

趙惠文王卒 ちょうのけいぶんおう、しゅつす（34）

入門313にいう「死亡のことを身分によって区別し、天子には崩といい、諸侯には薨といい、士大夫には卒といい、庶人には死という」（資治通鑑 65 赤壁之戦、荊州の劉表が「卒」したことについて）

本シリーズから用例を少し拾ってみる。

崩一周の武王・宣王（第1冊49, 54）

薨一秦の昭王（63）・同じく夏太后（70）

卒一晋の文公（1-157）、楚の荘王（1-184）、孔子（1-218）

楚の平王：卒（楚世家、伍子胥伝 1-253）、死（刺客伝 84）

西周の武王や宣王は中国の主権者であるから、その死を崩というのは当然である。秦の王族については妥当なのか。その他の人はどうか。

二 金額の単位

呂不韋伝にいう。彼は商売をして1000金をもうけた。そのうち500金を子楚に与え、500金を秦王室への工作資金に使う。残りはほとんどないはずである。子楚は600斤を趙の役人に賄賂としてやり、脱出して秦へ帰国する。まもなく王位につき、莊襄王となった（その子、実は呂不韋が生ませた子が政＝始皇帝である）。子楚が500金をもらい、600斤を使うと、いくら残るか。この収支の答えはどの訳註にもない。

本書で金額に関する箇所を拾うと以下のようになる。

頁	使	途	金額と単位
66	呂氏春秋の誤りを発見した者に対する賞金		1000金
96	嚴仲子が聶政の長寿を祈願する費用		100溢 [鎰]
102	自殺した者（聶政）の身元を通報した人への賞金		1000金
127	秦から脱走した樊於期の首にかけた賞金		1000斤・邑万家
129	荊軻が秦王を刺殺するために買った短刀の代金		100金
134	荊軻が秦王に会うためにその臣に贈った品物の価格		1000金
138	秦王の危機を救った夏無且への賞金	黄金	200溢
261	項羽の首にかけられた賞金		1000金・邑万家
1-250	伍子胥が江を渡る時、船頭に与えた自分の剣の価値		100金

史記平準書・漢書食貨志、および陔余叢考30「一金」によると、秦の1鎰＝漢の1斤＝1金。馬1頭＝100金。戦国時代には統一の通貨がなかったから、厳密な説明は司馬遷にもできなかったかもしれない。

3 動作

刺客は、セキカクとも読むが、シカクでもかまわないだろう。本書はシカクとルビをつけている。刺客列伝の荊軻の部分は面白い。それを楽しむには、余計な部分を省略するのがよい。余計なのは次の2箇所である。122頁「今秦已虜韓王……諸侯服秦，莫敢合従」要するに秦は強いということがわかればよい。地名の考証は専門家に任す。134頁、秦の臣、蒙嘉が秦王に「燕王誠振怖大王之威……恐懼不敢自陳」というのは、王に物を言う時の儀礼的お決まり文句、つまり王を礼賛し、他国をけなす内容である。これも読み飛ばしてよい。

テロリストの伝記であるから、その動作を具体的に頭に描くと、楽しい。それにとって最も役に立つのは、宮崎市定「身振りと文学——史記成立についての一試論」（『アジア史論考』中、および『中国古代史論』所収）と『史記を語る』（岩波新書）である。

荊軻は衛の人、読書と「撃劔」を好んだ。旅に出て、人と劔を論じたり、賭けごとをしては、負

けて去った。“韓信の股くぐり”に似た真の勇者の態度である。燕へ来た。その太子、名は丹、強国秦に敵意を抱いている。太子は傅（教育掛）鞠武に、秦に対する策を問う。その頃、秦から将、樊於期が亡命してきた。太子は鞠武の反対にもかかわらず、これをかくまった。太子は鞠武の助言により、燕の方策につき、智勇兼備の老人、田光先生の教えを請うことにする。

田光は太子のところへ来た。「田光坐定」でんこう、ざ、さだまる（117）訳「田光が座についた」（118）「坐定」は「ざ、さだまる」が訓読の慣例らしく、本書も国訳漢文大成もそうである。これはこの2字でひとつの動詞、主な意味は勿論、坐という字にあり、定は副詞的にそれを補う。現代語では「坐下」に当たる。日本語では「すわる」としか言いようがない。ゲストが来てすわるのは当たり前である。当たり前でないのは、ホストたる太子が「席を避けた」ことである。これはゲストに対するホストの非常な敬意を表す動作である。後に荊軻が来た際も、太子は同じ動作をした（122）

中国の家屋は土で作られており、部屋の床も土で、敷き物をしいてある。人がすわるのは、その上に置く「席」すなわち長方形の敷き物で、何人かがすわれる。椅子ではない。主人は客の隣にすわって、サービスするのが、礼儀である。

田光は、自分は老いて役に立たぬからと、荊軻を推薦する。その後で彼は自殺する。その理由の一は、「言う所の者は国の大事なり。願わくは、先生、泄らす勿れ」と太子に言われ、自分が疑われたと思った屈辱を晴らすため、他は、命がけの仕事人をやらせて自分が生き残るわけにはいかないという義理である。

太子は荊軻を呼んで、計画を説明する。「悉く諸侯の侵地を反さしめ、曹沫の斉の桓公におけるごとくならしめば、則ち大いに善し。もし不可ならば、因ってこれを刺殺せん」（122）魯の曹沫が斉の桓公を、両国講和の式場で、匕首（あいくち）をもって脅迫し、斉が魯から奪っていた土地の返還を約束させた話は、刺客列伝の第一話である（78）

秦王（始皇帝）に近づくにはどうするか。お土産が必要である。その一は、秦から逃げて来た樊於期の首である。荊軻は率直に彼に申し出て、彼も自らの首を与える。「鬼気肌身に迫る光景」と宮崎はいう（史記を語る 188）第二は、燕が秦に割譲する土地の地図である。もうひとつの問題は、王以外は武器を持つことを許されない秦の殿上へ、武器を持ち込む方法である。紙のない当時、地図は布に描かれたのではないか。それを巻くか畳むかして、中に刃物を隠し、箱に収める。なお荊軻は樊於期との会談の中で、秦王を襲う動作のリハーサルをして見せる、「左手もて其の袖を把り、右手もて其の胸を刺さん」と。かれは本番でこのとおりやるが、失敗する（128、136）

荊軻は一緒に行く友を考えているらしいが、その人は遠くにいて、間に合わない。太子は秦舞陽をつけてやることにした。13歳の時に人殺しをしたことのある男である。荊軻がぐずぐずしていると思った太子は、いらだって、秦舞陽だけを先に行かせようとした。これに荊軻の面子は傷つけられた。彼は言う「往きて返らざる者は豎子なり」豎子を本書は「青二才」と訳している。だれを指すか。他の訳註は、秦舞陽とする。ただ岩波文庫版『史記列伝』（2）だけ「ひとたび行けば帰ら

ぬのは、拙者でござる」と、荊軻とする。「壮士、一たび去って復た還らず」と比べて、どうか。「壮士」と「豎子」とは反対の価値をもつ語で、これが同一人を指しうるか、問題のある箇所である。

易水の別れの場面は、他のところが「語る」のに対し、「歌う」ところであり、音楽入りの芝居のようである。そのクライマックスをなす所作は、「士、皆目を瞑らし、髪尽く上りて冠を指す」同じことは、藺相如が“璧を完うする”場面「璧を持ち、卻き立ちて柱に倚る。怒髪上りて冠を衝く」（13）にもみえる。

秦に入って、いよいよ王に会見することになった。暴れ者秦舞陽は、かんじんの時に震えだした。秦王は舞陽から地図の箱を受け取って蓋を開く。「秦王、図を発く。図窮まりて七首見わる。因りて左手もて秦王の袖を把り、右手もて七首を持ち、これを刺す」秦王がゆっくりと地図をあけるなら、その中の七首に気がついて手に取る。それを荊軻が奪うのはむづかしいはずである。或いはもし王が地図の端を持って、投げるように開くなら、中にあった七首がコトリと床に落ち、待ち構えていた荊軻が、容易にそれを取ることができる。とにかく七首が荊軻の手に入らないと、話が續かない。

それから後の司馬遷の記事は、さながらチャンバラの実況中継である。ここでは宮崎がいうように、3字の「時惶急」「卒惶急」「卒惶急」3句は「がんばれ」というような合の手であろう。そう解さないと、この場面の面白さは味わえない。ただしそこは秦王のピンチであり、惶急の語義からも、「タイヘンです」とする方がよくないか。時・卒はとも時間の副詞で、時は始まりであり、卒は最高潮に達した時点を指す。したがって「さあタイヘンです」「いよいよタイヘンです」という訳はどうか。

荊軻は最後に七首を秦王に投げつけるが、あたらず、「桐の柱にあたった」（136）秦の宮殿に桐の柱は似あわない。「銅」とするテキストもあるが、銅に刃物が刺さるだろうか。この場面を描いた画像石がいくつもあるようで、宮崎『中国古代史論』の表紙カバーにその一つを載せる。柱の太さは直径30センチぐらい、七首が突き抜けている。

荊軻は殺される前に、失敗の原因を言う「生きながらにしてこれを劫かし、必ず約契を得て、以て太子に報ぜんと欲せしを以てなり」（136）前述した太子との会談にあったように、秦王を殺して自分も死ぬことは、第二の策であったようである。

事件のあと、以前に賭けごとで荊軻を負かした魯句踐は、荊軻が「刺劔の術」を習わなかったと惜しんだ。刺劔は相手に接近して短刀で刺すのに対し、荊軻が好んだ「擊劔」は離れて切り合うこと（辞海に引く漢書司馬相如伝、顔師古の注）と解してよい。

あ　と　が　き

筆者は、著者田中先生には、1951年以来、学恩を受けている。一海先生とは、親交はないが、同世代である。この拙文を捧げて、お二人のご健康を祈る次第である。